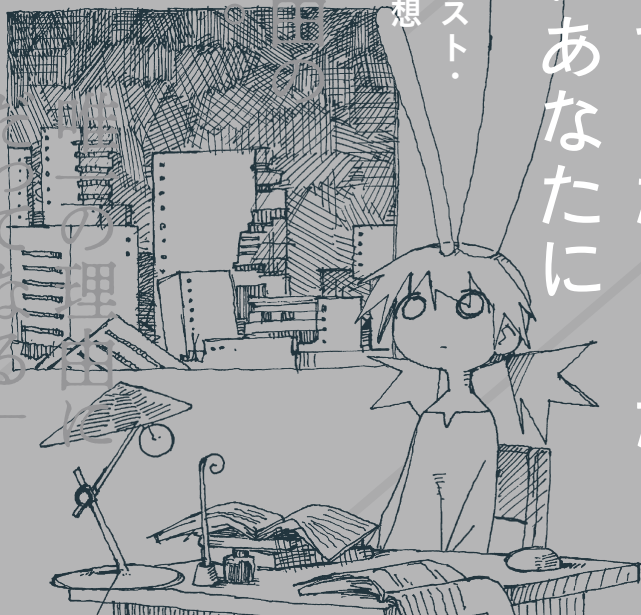


大谷 崇

生にはなんの意味もないという
生まれてきたことが
苦しいあなたに
最強のペシミスト・
シオランの思想



“生きることを嫌う”
からこそ、
あなたの人生は楽になる。

生きづらさを感じている人ならば必ず響く、シオランの言葉。
気鋭の研究者がひもとく、いまこそ読まれるべき思想家のすべて！

生まれてきたことが苦しいあなたに 最強のペシミスト・シオランの思想

大谷 崇

星海社

158



SEIKAISHA
SHINSHO

本書は、エミール・シオランの思想について扱う。シオランは、1911年に今のルーマニアに生まれ、第二次大戦後フランスで活躍した思想家・哲学者・作家・エッセイストである。

シオランは「ペシミストたちの王」とも言われるように、暗い思想で知られる。ニヒリズムの思想家と呼ばれることもよくある。暗い思想が大好きな私などはむさぼるように読んできた。彼の思想が暗いことは、次の文章だけでわかるだろう。

独りでいることが、こよなく楽しいので、ちょっとした会合の約束も、私には磔刑にひとしい。

《告白と呪詛》6頁

人間は、自分が呪われた存在だということをたやすく忘れてしまう。世の始まりからして、呪わ

れているせいである。

『告白と呪詛』 39頁

このような彼の暗黒の思想を、もっと多くの人に知ってもらいたいというのが本書執筆の動機だ。暗いことを言う人が好きなのに、シオランを知らない、読んだことがないというのはいらないことだと思う。本書はそういう人たちにシオランを紹介することを目的のひとつとしている。

ただ、本書の目的は紹介するだけではない。本書を通して言いたいことは、こんなにネガティブなことを言うシオランは、実は私たちが人生を生き延びるためにとても役に立つ、ということだ。だから、別に暗い思想が好きというわけではない人にも読んでもらいたい。とはいえ、たしかに彼の思想は暗いが、不思議なことに彼の文章を読むと、意気消沈するどころか、逆に元気になってしまうことがよくある。それは彼がネガティブなことをこのうえなく「生き生きと」語ってくれるからだろう。読者も本書の後に彼の本を読んで、ぜひ一度体験していただきたい。

シオランの本は、哲学の本によくあるような、専門用語が満載の難解なものではないので、予備知識なしの人でも読める。ただアイロニーと逆説を駆使した文体なので、彼の関

心がどこにあるのかを知らないと、わかりにくいかもしれない。本書が、彼の関心を知る助けになれば幸いだ。

本書は、第一部と第二部と大きくふたつに分かれる。第一部は、いわば「紹介編」で、シオランの思想を、怠惰・自殺・憎悪・文明・人生・病気などさまざまなトピックにわたって具体的に紹介していくのが趣旨だ。第二部は、いわば「批判編」で、シオランの思想がいったいどういったものなのかを、批判的に見ていくことになる。

第一部は気になるトピックから読んでいただいて構わないが、第一章「怠惰と疲労」・第三章「憎悪と衰弱」・第四章「文明と衰退」だけは、数字に従ってこの順に読み進めていただいたい。第二部も第一部を前提しているので、第一部を読んだ後に読んでいただきたい。

このほかに、シオランの生涯について述べた章と、簡単なコラムを用意した。どちらも本編には影響しないので、後から読んでいただいても構わない。

シオランの著作からの引用にあたっては、基本的に邦訳があるものは邦訳を引用させていただいたが、一部改変した箇所があり、そのつどその旨を付記した。未訳のものからの

引用は拙訳と記した。書名については、『カイエ 1957-1972』のみ、煩雑を避けるため『カイエ』と略した。彼の著作については、巻末の参考文献の欄で一覧できる。

＊

最後に、シオランを論じる本を書くことについて弁明をしなければならない。これはお約束のようなもので、読み飛ばしていただいても構わない。

よく「翻訳とは裏切りだ」とも言われるが、シオランについての本を書くのは、それ以上の裏切りかもしれない。まあ次の彼の発言を見てほしい。

自分について書かれたものを読むと、疲労と嫌悪の印象がいつも残る。こういう解剖の仕事がなんの役に立つのだろうか。批評とは軽蔑すべき活動、それどころか有害な活動だ。作品を読むこと！ これ以外は無駄なことだ。

自分では言うべきことが何もないから（あるいは、他人を介してしか言いたいことが言えないから）、いつも他人について書くのだ。

どんな愚劣な解説者にもあるバカげた思い上がり。自分独自の思想などただのひとつも考え出せなかった者が、ただ神にのみそうする権利があるように、私たちを評価するのだ。批評家は、この特権を不当に自分のものにして、自分は並の人間ではなく、自分にはすべてが許されると思い込んでゐる。

『カイエ』940-941頁

紋切型の返答なら用意できる。自分にはすべてが許されると思つてなどいない。独自の思想を持つことと、他人の思想について書くことは無関係である。解剖・解説の仕事はけつして無駄な仕事ではない、等々。だがそれ以外には正直なところ、私はこの言葉に対する返答を持ち合わせていない。せいぜいが、まったくそのとおりです、私は自分がどんなに下司野郎かを示すためにこの本を書くのです、どうか我慢してください、とても言うしかない。だが、次の言葉に対しては、私としてもちよつと言いたいことがある。

私にとってこの上ない屈辱となるものとすれば、それはなにがしかの成功を収めたあげく、自分について書かれた本や研究書が出版されるのを目にすることだ。こういう事態は、私には無名の者という私のいまの状態よりはるかに耐えがたい。つまり私からすれば、確固たる名声を得

ることほどつらい敗北はないのだ。

『カイエ』 424頁

彼にはお気の毒だが、シオランに関する研究書や論文は世界中かなりの数にのぼり、シオランの「研究者」だと称する恥知らずも結構な数を数える。私も本書でもつてその仲間に入ろうというわけだ（実は、すでに彼について論文を書いているので、その時点でアウトなのだが）。

もつとも、恥知らずの裏切り者だつて言いたいことがないわけではない。そもそも本を書いて出版などをしたのは、シオランのほうだ。彼が自分の作品を出版などしなければ、その作品を注釈する裏切り者など生まれるはずもなかった。だから彼がつらい敗北をこうむったとしても、その責任の一端は彼にある——というのが、裏切り者のひとりたる私が言いたいことだ。

これに対するシオランの反論のひとつは、自分は生きるために書いたのであって、読者の存在など想定していない、というものだ。だが、個人的なノートにとどめておくのならいざしらず、それをフランスでもつとも権威のある出版社から単行本として出しておいて、それはないだろう。まあたしかに、公共の場で悪態をつかないと生きていけないような病

気というのは想定できるし、それはしかたがないことだ。だが、あまりにその悪態が見事なので、ついつい聞き惚れてしまうのも、またしかたがないことではないだろうか。

だが、もし彼が実際に何も書かなかった場合、私たちはシオランの作品と出会えるはずもなかった。それはとてもとても大きな損失だ。だから、シオランには本を書いてくれたことに対して感謝したい。読者にもぜひ彼の本を読んで喜ぶという、いささか倒錯的な体験をしてほしいと思っている。そのためなら、裏切り者の汚名くらい、喜んで受けたいと思う。

目次

まえがき 3

シオランの生涯

21

出生と幼年時代 23

シビウでの生活 24

大学生活とデビュー 26

ジャーナリズム活動 29

ドイツ留学 32

ブラシヨフで定職に就く 33

パリへ 35

最後のルーマニアへの帰国 37

戦時下のパリで 39

出会いと別離 42

フランス語で書くことの決意 43

『崩壊概論』の成功 44

『苦渋の三段論法』の失敗 46

『実存の誘惑』、『歴史とユートピア』、『時間への失墜』 47

健康重視の生活 50

イビサでの出来事 51

シオランの成功 53

シオランの病と死 55

コラム

シオランの名前 58

第一部

シオランと見る人生と世界

62

第二章

怠惰と疲労

64

「パラサイトの生活を送りたかった」 66

私たちが押し殺している怠惰の高貴さ 69

怠惰とは行為の拒否である 71

日常的観点から見た怠惰 75

社会とは番人のいない牢獄 78

世間は怠惰より人殺しのほうに寛大 81

世界の錯乱に同調しない怠惰 85

悪の源泉としての行為 87

怠惰のユートピア 92

横たわることと、怠惰の重要性
94

第二章

自殺

98

シオランと自殺
103

自殺の観念の効用
106

自殺は解放である
109

自殺は本当の解決策か？——
ショーペンハウアーとカミュ
114

最後の報復としての自殺
116

人生を偶発事とみなすこと
118

自殺の遅延としての人生
121

憎悪と衰弱

126

錯乱した世界で 129

固有の意志の争い 133

悪徳の有益さ 135

友と敵 138

憎悪とは力である 141

憎悪と怨恨の快感 145

中立の不可能性 149

無関心の無力さ 151

万能な善悪二元論 154

衰弱の利点——懷疑、寛容、自由 157

衰弱の脆弱性 163

人類全員がペシミストになる日？ 165

シオランの友と敵

168

第四章

文明と衰退

174

歴史の暴虐

178

文明の強健と衰弱

181

帝国と自由国家

184

自由の逆説

187

衰弱の批判？

191

ユートピアとアポカリプス

193

野蛮の誘惑

196

自由と無関心

200

圧制者と奴隷 207

凋落の時代の役割 210

第五章

人生のむなしさ 216

人生はむなし 219

人生の疲労 221

人生の徒勞 223

それが何になる？ 226

どうせ死ぬのだから——テロリストの論理 227

勝とうが負けようがどうでもいい 230

人生に意味はないという喜び 233

人生に意味はないということが生きる理由の一つになる 236

結論、やはり人生はむなし 238

第六章

病氣と敗北

240

病氣は実在する 246

苦悩は実在する 250

挫折した人間 253

敗北の礼賛 256

死と敗北 261

敗者の厄介さ、苦しみの思い上がり 263

怨恨のオデュッセイア 269

シオランのケース 271

栄光こそは一つの盗みである 275

苦しみの効用 281

第二部

シオランの失敗と「再生」

286

——生まれないことと解脱

人生へのうんざりと覚醒 290

生を厭うペシミズム 292

死は生に内在している 294

どうすれば生からも死からも救済される？ 298

「解脱」と「生まれないこと」 299

生まれなければよかったのに 301

反出生主義——子供を作るべきではない 304

解脱と知恵の伝統 307

解脱は人生を克服する 310

生きたまま死者になること
312

解脱の不可能性
319

私たちは苦痛を求めてしまう
321

解脱とたもとを分かつシオラン
323

ペシミズムは人生を憎むことを愛してしまう
325

シオランの弱さ
329

ペシミズムの大失敗
333

「生きる知恵」としてのペシミズム
336

失敗のゆえに近い
339

あとがき
341

参考文献
346

第一部

シオランと見る人生と世界



1

第一章

倦怠 疲労 と

私にあるよきもの、これはすべて私の怠惰の賜だ。
もし私が怠惰でなかったなら、いったいだれが悪しき計画の実行を
私に思いとどまらせることができたであろうか。

「パラサイトの生活を送りたかった」

実のところ、シオランは自分の書いていることを生活でそのまま実践しているわけではない。彼はとても暗い本を書くけれども、日常生活では明るく、よく笑い、人と話するのが好きだった。また、彼は書物上では自殺を推奨したりするけれども、実際に自殺願望がある人と話すときは、たいいてい自殺を奨めていなかった。ちなみに、この言動不一致の点で、ニーチェに似ているのはおもしろい。というのも、シオランはニーチェを言動不一致であるとして批判しているからである。

そんな言動不一致なシオランの言動が一致しているもののひとつに、労働の拒否と怠惰の礼賛がある。彼は22歳のときの本から71歳のときの本まで、一貫して労働を拒否し、怠惰を礼賛している。その例として、次の引用のひとつめは22歳の時の『絶望のきわみで』から、ふたつめは71歳の『告白と呪詛』からである。

一般に人間は労働過剰であって、この上さらに人間であり続けることなど不可能だ。労働、すなわち人間が快楽に変えた呪詛。もっぱら労働への愛のために全力をあげて働き、つまらぬ成果しかもたらさぬ努力に喜びを見出し、絶えざる労苦によってしか自己実現はできぬと考える——こ

れは理解に苦しむ言語道断のことだ。

（『絶望のきわみで』 160-161頁）

根源的なものを垣間みたければ、どんな職業にもたずさわってはいけない。一日中、横になったまま、嘆いたり呻いたりすることだ。……

（『告白と呪詛』 50頁）

それでは実生活ではどうかというと、彼は1936年から一年間だけ、ルーマニアの都市ブラショフで高校教員として勤めていたことがある。彼はたった一年間だけ続いたこの高校教師の職を辞するとき、「もう働きたくないものだ」と思った、と対談で語っているが、実際この一年間の高校教師のほかは、短期間のものを除けば、定職に就くことなく、「パラサイト」の生涯を終えたのだから、これはかなり言動が一致していると言ってもいいだろう。

私は働いて自分を破壊するよりも、パラサイトの生活を送りたかった。それは私にとってドグマのようなものでした。自分の自由を守るためにはどんな貧困も受け入れました。パラサイトの人とは、つまり楽園のような素晴らしい人生ということですが、これだけが私には唯一耐えられ

るものだと思います。：私の夢は一生奨学金で暮らすというものでした。これだけが私の気に入るものでした。

（ガブリエル・リーチエヌとの対談、拙訳）

シオランは「パラサイトの人生」を、「周辺のアウトサイダー、マージナルな人間」「言葉の通常の意味で働かない人間」と言い換えている。本章では、シオランの目指したこの働かない人間という理想、この労働の拒否と怠惰の礼賛について取り上げていきたいと思う。

一般的に言って、労働および勤勉は美德のうちに、そして怠惰は悪徳のうちに数えられる。だが、シオランによれば、怠惰はたしかに悪徳であるが、「高貴な」悪徳である。「懷疑と怠惰——彼らのあらゆる美德より高貴な悪徳」（『崩壊概論』14頁）。

シオランが勤勉さを尊ぶ世間一般の価値観に反して怠惰を礼賛するのも、この「高貴さ」のためなのである。どうして怠惰は「高貴」なのだろうか。怠惰の高貴さとはどこにあるのだろうか。そもそも怠惰とはなんなのだろうか。

私たちが押し殺している怠惰の高貴さ

シオランは労働が大嫌いだったし、また彼は非常に怠惰だった。怠惰を運命づけられていたとさえ言ってもいい。仕事をしたいと思うときがあっても、何も手につかないことがしばしばだった。彼が日々の考えを綴った『カイエ』のページは、仕事をしたいと思うのにできないという歎きの声でいっぱいである。例えば次のような文章がある。

不毛、嫌悪。仕事ができない。観念めいたものすら生み出すことができない。感電死した脳髓。

(『カイエ』 525頁)

もう駄目だ。こうして時間を無駄にしているのか。午前中、ほとんど昼ちかくになって、例によってまだ仕事に取りかかっていないのに気づき、あやうく落涙するところだった。

(『カイエ』 135頁)

この引用文で言われている「仕事」とは執筆活動のことだが、実のところ、シオランは執筆活動で生計を立てていたわけではない。一般に、仕事や労働と言っても、もっぱら生

活のために行われる「労働」と、趣味や自己実現のために行われる「仕事」は区別されるべきだろうが（「やりがいのある仕事」とも言われるように、このふたつが同一の活動となることもしばしばだ）、ここでは一緒くたにしてしまっても差し支えない。というのも、自己実現のためにやる仕事さえ嫌なのだから、生活のためにやらざるをえない労働が嫌なのはおさらだからだ。それに、これから説明していくように、怠惰な人間は、そもそもあらゆることがおつくうなのだ。

もちろん、シオランの怠惰は彼個人の性格や気質の問題だといえはそのとおりだ。だが、怠惰はシオラン個人の問題に尽きるわけではない。それは私たちのものでもあるからだ。多かれ少なかれ、私たちも怠惰の状態を経験している。なかにはシオランのように——もしかするとシオランよりもひどい怠惰に陥って、何もしたくない人もいるだろうし、あるいは一時は怠惰になっても、すぐに立ち直って仕事に戻る人もいるだろう。

それでも、怠惰は私たちの問題でもあることに変わりはない。だから、もし怠惰の高貴さというものとすれば、私たちはそれを経験したり、それを押し殺したりしているということになる。

これは筆者の印象だが、どうも日本の世間では、怠惰な人間はあまり目立っていないよ

うである。過労死やいわゆるブラック労働のニュースは相変わらず絶えない。といっても、ここでそのような社会問題について直接取り組みたいわけではない。ただ、シオランが言う、私たちが押し殺しているかもしれない怠惰の高貴さに目を向け、それがどのような広がりを持っているのか、提示してみたいと思っている。

ちなみに、以下で無職の人と指して主に言っているのは、怠惰のあまり、あえて好んで無職であることを選んだ人、あるいは無職であらざるをえない人のことであって、働く気力も意志も十分あるのに、不本意ながら失業している人のことではない。もちろんこういうのはグラデーシヨンの問題だし、後に言う中途半端な怠惰の例のように、働きたくないと思いつつも働いている人や、逆に働いていないし無職であるのを好んではいるが、将来の不安から就労を考えている人などもあるだろう。しかし以下では、かなりの程度怠惰な人のことを代表させて無職の人と呼んでいるので、ご了承願いたい。

怠惰とは行為の拒否である

前節で、怠惰は多かれ少なかれ私たちも経験しているものだと言った。この意味で怠惰は私たちに関わりがある。そして同時に、怠惰は仕事や労働だけでなく、活動や行為一般

に関わりがあるという点でも、怠惰に注目する価値はある。では、怠惰とはなんなのだろうか。先取りして言ってしまうと、そもそも行為そのもの——何かをすることそのものの拒否こそが、怠惰なのである。

朝、目が覚めても、何もやる気が出ず、ベッドや布団から身を起こすのもだるく、そのまま学校や会社を休んでしまった——こんな経験をした人は少なくないだろう。シオランは次のように言っている。

「ああ、また一日が始まった、またこの日に耐え、この日を終えなければならぬのか」と考えねばならない苦しみたまさる苦しみはないでしょう。

（『シオラン対談集』254頁）

朝だ、目が覚めた。また一日が始まってしまふ。なんとかこのまま時間が止まってくれないものか。いや、そんなことは無理なのはわかっている。もうすでに一日が始まってしまっていることもわかっている。あれをやらなければ、あそこに行かなければ。その前にまず起きなければ。いや、もう構うもんか、どうでもいい……。

この怠惰について、二十世紀フランスの哲学者エマニュエル・レヴィナスは、初期の著

作『実存から実存者へ』のなかで、詳しく分析を行っている。レヴィナスによれば、怠惰とは、「行為に対する拒否ないし開始の不可能性」である。そして「行為は存在への登録」である以上、「行為を前にしての後ずさりとしての怠惰は、実存を前にしてのためらい、無精で実存したがないということなのだ」（『実存から実存者へ』51―52頁）。

怠惰とは「開始の不可能性」であるというのは、よく実感できることだろう。目覚めた後、ベッドに横たわったまま願っているのは、まさに一日が始まらないことではないだろうか。一日が始まる最初の行為、すなわち起き上がることを拒否しているのではないだろうか。

実のところ、一度起き上がってしまえば、案外何事もなかったかのように顔を洗い、朝食を食べ、外出し……と一日は流れていくものなのだが、これも多くの人が実感しているのではないかと思う。最初に起き上がるこそ、一日のなかで一番つらいことだ。このように、怠惰は始めることの拒否、始まりをもたらず行為の拒否である。シオランも次のように語っている。

「開始する」——私の悪夢。何かをはじめめることは、私にはつねに困難きわまりないことのように

思われる。

（『カイエ』259頁）

加えて、怠惰は行為を開始することへの拒否というだけでなく、そもそも存在することへの拒否でもある。先のレヴィナスの引用文中の、「実存を前にしてのためらい、無精で実存したがない」というのはそういうことだ。レヴィナスは、「存在する」という動詞のうちには、再帰動詞としての性格があると言う。すなわち、「ひとは「存在する」のではなく、「ひとは自らを存在する」のだ」（『実存から実存者へ』53頁）。

このような「自らを存在すること」、自らの存在の重荷を引き受けることこそ、怠惰が拒否していることだ。自分の存在を引き受け、自分のことや他のことにかかずらうこと、つまりは普通の生活、そんなのは自分なしでやってくれ、放っておいてくれ。怠惰とはこのような行為なのである。

今、怠惰は行為であると述べた。レヴィナスも指摘しているが、怠惰は行為を拒否するにもかかわらず、それでもひとつの行為であるのは確かだ。それは行為を拒否するという行為であらざるをえない。存在することの拒否は、すでに存在していないとできないことだ。

だから、怠惰は怠惰であり続けることはできず、挫折を余儀なくされている。単純に考えても、ベッドに横たわったまま何もしないでいれば、肉体的に死んでしまうだろう。それはそれで見事な行為であり、他のものとは次元の違う行為であるのだが、それでもひとつの行為であることに変わりはない。

以上、レヴィナスの助けも借りて、怠惰とは何かを考えてきた。すなわち、怠惰とは、行為の拒否、開始の拒否、存在の拒否、という行為である。これは哲学的観点から見た、怠惰の意味であると言えるだろう。それでは、シオランの言う、このような怠惰の「高貴さ」とはなんなのだろうか。怠惰のどこに高貴さがあるのだろうか。次節以降で、さらに見ていきたい。

日常的観点から見た怠惰

前節では、主に哲学的観点から怠惰を考察したが、それを受けて本節ではより社会的、あるいは日常的観点から怠惰を見て、その高貴さを探っていきたいと思う。社会的あるいは日常的観点とは、怠惰な人間が他の人々に与える影響、あるいは怠惰という状態が、社会における怠惰な人間その人に与える影響を考える視点である。

前節でも述べたように、普通に考えて、ベッドに横たわったまま何もしないでいれば、死んでしまう。だから大抵の怠惰な人間はしぶしぶ食事をする。食事だけではない。この社会では生きていくだけで金がかかる。だからそれほどでもない怠惰な人間は仕事をするし、もう少し怠惰な人間は仕事もせずにだらだらする。それではこのだらだらしている人間は社会に対してどのような位置にあるのだろうか。そして社会のただなかにいる怠惰な人間の怠惰は、いかなる意味を社会に対して持つのだろうか。

当たり前の話だが、人間社会はさまざまな行為から成り立っている。それは呼吸する、食べる、寝るといったプリミティブな行為から、演説する、作曲する、計算するといった複雑な行為まで含まれる。

このような人間社会の目的は何か、人間社会は何を目指しているのか、というような問いは、大きな（大きすぎる）問いだし、議論も分かれるだろうが、ひとつ言えるのは、個人・社会の維持および再生産は前提されなければならない、ということだ。人間社会がどこに向かうにせよ、何を目的にするにせよ、社会それ自体が維持されていなくては、元も子もない。

ところで、怠惰な人間とは、この個人・社会の維持および再生産に対して気が乗らない

人間のことである。そもそもベッドから起きることすら嫌で、食事さえもしぶしぶしているのだから、どうしてそんなことに気が乗るだろうか。社会からの要請にどれだけ応えるかは人によるし、怠惰がどれだけひどいかにもよる。そのなかでも怠惰がひどい人は、仕事にも就かず、他人に寄生してようやく生きていけるような生活を送ることだろう。

無職で何もしない人間に対する世間の目は厳しいものだ。それが勤勉をよしとする社会であればなおさらだ。これについて、シオランは次のように言っている。

社会というものが出来て以来、そこから逃れようとする者は迫害され、嘲笑された。君がひとつの生業を、名前の下につける肩書を、君の虚無の上に捺す印章を持ちさえすれば、あとは何をしようと構わないのだ。《俺は何もやりたくない》などと叫ぶ大胆さは、誰一人持ち合わせていない。——世間の人は、あらゆる行為から解放された精神に対してより、人殺しに対するほうが寛大である。

『崩壊概論』256頁、一部改変

この文章について、次の疑問が立てられる。①「君の虚無の上に捺す印章を持ちさえすれば、あとは何をしようと構わない」とは、どういう事態だろうか。②なぜ、世間の人は

人殺しに対するほうが寛大なのだと言えるのだろうか。①は引用文の前半についての疑問であり、②は後半部分についての問いである。この文章全体を読解していくことで、シオランの怠惰についての考え、そして社会における怠惰な人間についての考えに迫ることができるだろう。

社会とは番人のいない牢獄

まず、①の疑問について見ていこう。繰り返しになるが、前節で引用した文章の前半部分は、次のようになっていた。

社会というものが出来て以来、そこから逃れようとする者は迫害され、嘲笑された。君がひとつの生業を、名前の下につける肩書を、君の虚無の上に捺す印章を持ちさえすれば、あとは何をしよう構わないのだ。

最初の文章については、まさに文字どおりのことを意味しており、問題ないように思える。「社会から逃れようとする者」が具体的にどういう人かというのは、その次の文章で説

明されている。つまり、「ひとつの生業」を、「名前の下につける肩書」を、そして「君の虚無の上に捺す印章」を持たない人である。どんな職業に就いているか（生業）、どんな社会的ステータスを持っているか（肩書）、これらがもともとは虚無たる人間の上に押す「印章」である。それさえ持つていれば、社会はその人にとりたてて関心を向けることはない。逆に言えば、それを持たない者、つまり無職の人間、そして怠惰な人間は、迫害され、嘲笑されることになる。どちらも《俺は何もやりたくない》と叫ぶ人間であり、社会的肩書を（無職というほかは）持たない人間だ。

前節で、社会の維持および再生産が社会の重要な前提であると述べた。そして怠惰な人間は、社会が求める再生産と役割を拒否する。怠惰な人間が迫害される理由のひとつだ。仕事もせず、あらゆる社会的役割を拒否する人間は、生きていくのさえ困難な状況に陥る。社会の方でも、特に資本主義社会で顕著だが、社会の要求から逃れようとすれば死んでしまふぞと脅迫し、職業に就かせ、役割を受け入れさせようとする。シオランは次のように言う。

自由になろうと努めてみたまえ。君は餓死するだろう。社会が君を生かしておいてくれるのは、君

が交互に奴隷になったり暴君になったりする、その限りにおいてである。社会とは番人のいない牢獄なのだ、——ただしそこから逃げ出せば、破滅が待ち構えている。

（『崩壊概論』180頁）

奴隷になったり暴君になったりするとは、政治的な支配関係に対しても、経済的な支配関係に対しても言えることである。奴隷であれ暴君であれ、言葉を換えれば、負け組であれ勝ち組であれ、その社会構造を承認し、その下で生きようとする限りは生かしておかれるが（実際には、その保護からすら弾き出されることも多々あるが）、あえて無職であろうなるとすれば、つまり、社会から逃れ、自由になろうと努めたりすれば、報復が待ち受けているのだ。

このように、社会は人をひとつの職業に事実上強制的に当てはめる。確かに番人はいない。人はいつでも社会から逃れようとすることはできる。だが、その破滅的な帰結でもって、番人のいない牢獄から逃れることを困難にしている。

しかし、怠惰な人間にとって、生きることすら大変な労苦なのに、その上労働が重なるというのは、二重の苦しみだ。シオランは次のように言っている。「私たちはひとつの仕事をもつことを求められている。——まるで生きることがひとつの仕事、それももつとも困

難な仕事ではないかのようだ」(『思想の黄昏』116頁)。

とはいえ、うまくやってのけることは不可能なわけではない。シオラン自身も、かなりうまくやった方である。彼は売れない作家としてパートナーの女性に寄生し、生きる困難にたびたびうちひしがれながらも、ついに84歳まで生き延びた。「私の生涯の大成功といえば、職業に就かず生き、生きること成功したことですね」(ガブリエル・リーチエヌとの対談、拙訳)。

とはいえ、彼は作家としての成功によって、また寄生という行為によって、完全に社会から逃れおおせたわけではないのだけれども。いずれにせよ、怠惰な人間に対しては、社会は容赦しないことは確かだ。

世間は怠惰より人殺しのほうに寛大

では、②の疑問に移ろう。先ほどの引用文の後半部分は、次のようなものだった。

《俺は何もやりたくない》などと叫ぶ大胆さは、誰一人持ち合わせていない。——世間の人は、あらゆる行為から解放された精神に対してより、人殺しに対するほうが寛大である。

なぜ、世間の人は人殺しに対するほうが寛大なのだとと言えるのだろうか。ここでシオンは明らかに誇張しているが、誇張するのは、それによって際立たせたいことがあるからだ。そして彼が際立たせたいことは、「俺は何もやりたくない」と叫ぶことは、社会にとつて、ある意味で人殺しより不気味で常軌を逸したものとみなされる、ということなのだ。それはつまり、殺人は社会の通常の活動の範疇に入るが、怠惰による無為はそうではない、ということだ。

詳しく説明しよう。何かをするためには、エネルギーが必要だ。先ほどの起床の例を思い出してほしいが、ベッドから這い出るのだってエネルギーがいる。なんだってそうだ。帰宅したもの、あまりに疲れているので、シャワーを浴びるのもおつくうで、そのまま寝てしまった経験はないだろうか。休みの日には布団から出るのが遅くなるのも、誰もが経験することだと思う。何かを始めるのはエネルギーがいる。そして前節で見たように、怠惰とは、行為の拒否であり、何かを始めることの拒否だ。起き上がるのにも苦勞するのだから、他の複雑な行為をするのはもっとつらいことだ。

それに加えて、何かをするためには、動機や意図、そして選択と決断が必要だ。食事や

睡眠の場合、動機がとても強力なので、怠惰な人間でも動機にしたがつて行動せざるをえない。その食事にしたって、選択や決断の要素につまづくことはある。食事をしようと思うのだが、何を食べるのか決められない、「なんでもいい」と思ったことはないだろうか。何かを選択し決断することも、多大なエネルギーを必要とするもののひとつだ。ところでこの動機や意図に従って計画を立て、選択し決断する、というのが、社会の通常の活動の特徴であり、そして殺人と共通する特徴なのだ。

ある人が自室の中で人を殺すことを思いついたとしよう。だが怠惰なので、すぐに計画段階でそれを放棄してしまう。どこで？ 誰を？ 凶器は？ 計画を立てている途中で怠惰がやってくる。何とか計画を立てたでしょう。まずその人がベッドから出ることを拒否するほど怠惰な人間なら、ベッドから離れることすら労力があることである。やっと起き上がったが、今度は部屋から出る必要がある。自分や家族を殺すつもりでないならば、自宅から出なければならぬ。この時点で衰弱している人間には大変な苦痛だ。それで凶器を入手して、逮捕されたくないならアリバイ工作をして、殺害場所を選定し、目標をその場所におびき出して、最後にはうまくやり遂げなければいけない。捕まることを避けようとしぬ場合だって、大変な労苦なことには変わりはない。

怠惰な人間は面倒くさがり屋だから、こんなことはすぐに放棄してベッドに戻ることを選ぶ。だが勤勉な人間、エネルギーに溢れている人間は、簡単にやつてのけてしまうだろう。犯罪を犯すのは、怠惰な人間、衰弱した人間、ペシミスト、意志の弱い人間ではなく、勤勉な人間、生き生きしている人間、オプティミスト、意志の強い人間である。どちらの人間が社会で成功しやすいのか、言うまでもないだろう。

この意味で、世間の人は「何もやりたくない」と叫ぶ人よりも、人殺しに対するほうが寛大なのだ。なぜなら彼らは人殺しがしたかったこと、その動機に基づいて立てた計画、そして計画の実行——こうしたことについて理解できるからだ。それは通常の活動と共通しているのだ。

そして、何より人殺しはエネルギーに溢れて、活動的で、生彩があり、生き生きとしている。殺人事件のドラマと、怠惰な人間がずっと寝たままの映像、どちらを見たいと思うだろうか。だから世間の人が殺人事件のほうが好きだとしたら、それは世間の人が「正常」である証拠で、喜ぶべきことなのだとと言える。

もちろん、殺人は計画なしで、激情に駆られて起こることもありうる。だが激情に従うというのもエネルギーがいることだ。感情を抱き、それに振り回されるのはとても疲れる。

だから怠惰な人間は、一時は怒りの感情が湧いても、すぐにもとに戻ってしまうだろう。

世界の錯乱に同調しない怠惰

前節までの考察の結果から、シオランの怠惰についての考えを引き出すとすれば、どういふものになるだろうか。まず、哲学的観点から見て、怠惰とは行為を拒否することだった。具体的な例でいえば、朝起きるのがおっくうで、そのまま布団に潜りこんでしまうというのがそれだ。そこでは行為の拒否、そして行為と一日を開始することの拒否、さらにはそもそも存在することの拒否が、怠惰によって示されていた。

この行為の拒否としての怠惰は、社会的観点から見れば、労働も含めた社会的役割を担うことの拒否となる。そしてこのような怠惰は、ある意味では殺人よりも世間から忌避される。それは殺人が他の社会的活動と共通の特徴を持つからであり、また殺人が非常に「生き生きとしている」のに対し、怠惰はそうではないからだ。

シオランのいう怠惰の高貴さとは、このエネルギーのなさ、生命力の衰弱、生き生きとしていない非活発性に鍵がある。つまり怠惰な人間は、殺人に代表されるような生き生きとした行為を行わないがゆえに、そのような行為から帰結する悪に手を染めないのだ。こ

の考えをさらに展開すれば、まさしく怠惰な者、生命力に欠ける者こそが、「健全な」善人であるということになるだろう。実際シオランは次のように言っている。

私たちに健全な部分があるとすれば、それはすべて私たちの怠け癖のたまものである。行為に移ることをせず、計画や意図を実行しようとしないう能力のおかげである。《美德》を養ってくれるのは、実現の不可能性、あるいは実現の拒否だ。そして、全力を出し切ろうとする意志こそが、私たちを暴虐へ誘いこみ、錯乱へと駆りたてるのである。

（『生誕の災厄』42頁）

ところで、ここでは怠惰（怠け癖）は美德であると言われているが、本章冒頭の引用では、怠惰は「悪徳」であると言われていた。しかしこれは矛盾でもなんでもない。上記の引用ではシオランは怠惰の側に立ち、本章冒頭の引用ではその反対の立場に立っている、というだけの話だ。怠惰を擁護する方からすれば、怠惰は美德である。シオランはこのように立場を目まぐるしく転換し、逆説的な表現を組み立てている。しかし美德であろうと悪徳であろうと、怠惰の持つ特徴には変わりはない。

本題にもどろう。あらためて引用すれば、シオランは怠惰は「あらゆる美德より高貴な

悪徳」であると言っていた。今やこの高貴さがなんなのか、判明したと思う。何か計画や意図を実行し、全力を出し切り、本気を出して実現することは、美德のうちに数えられるだろう。そして私たちの周りを見渡してみよう。いたるところで頑張ること、努力すること、物事に全力でぶつかることが称揚されていないだろうか。

だが、このような行為の構造は殺人のような行為、すなわち悪の行為とも共通するものであったことは、すでに見たとおりだ。私たちのいる世界は、みんなが全力を出しながら、交互に奴隷になったり暴君になったりしている、錯乱した世界である。行為や実現を拒否することで、行為の悪にも世界の錯乱にも同調しないことを示すこと、これこそがシオラの言う、怠惰の高貴さなのである。

悪の源泉としての行為

前節で、怠惰は悪の行為に同調しないと述べたが、悪という言葉については詳しく立ち入らなかったもので、ここで触れておこう。とはいえ、ひとまずここまでの議論のなかでの悪は、一般的な考えそのままだ。つまり、他者に危害を加えることを指す。人殺しがその典型だ。

すでに述べたとおり、シオランは立場を目まぐるしく転換し、善悪の基準そのものについて、一般的な基準を採用するときもあれば、正反対の基準に従って書いているときもある。しかしいずれの場合でも、善悪の判断をあてはめる対象——つまり、人殺しなどの行為——は同じだ。

このことをふまえると、人殺しを含めた他者に危害を与える行為を悪と呼んでいるこの場合は、一般的な善悪の基準から言っていることになる。そのうえで、たとえば他者の苦しみを取り除こうという善の側に立って発言することもできるし、逆に悪の側に立って、生き生きと生きるためには悪をなさなければならぬと発言することもできる、というわけだ。一般的でない善悪の判断の基準を採用する例は、存在は悪であるとシオランが述べる 때가そうだ。

さて、怠惰の高貴さとは、前節で述べたように、行為の悪と世界の錯乱に同調しないということであったが、シオランの怠惰についての思想はこれに尽きるわけではない。本節ではもう一歩先に進んでみよう。

シオランは次のように主張する。すなわち、すべての悪は行為から生ずる以上、悪を避けたいと思うならば、行為の拒否である怠惰を奨励しなければいけない、ということであ

る。ふつう、私たちは悪を避けたいと思っているし、なるべく悪い出来事が起こってほしくない、悪いことをしてほしくないと思っている。そのように思うならば、無為と怠惰を推奨しなければならぬ、というのがシオランの言っていることなのである。

つまり簡単なことで、何もしなければ悪は起きないのだ。言われてみれば当たり前の話である。だが、このことはよく考えられてはいないのではないか。あるいは、あまりに見過ぎられているのではないか。もちろん、何もしなければ、悪を罰することも、阻止することもできない。だから現実では、完全に無為を実行することはほとんど不可能なことである。

しかし、そもそも何かをする奴がいるから、何かをしなければならなくなったのだ。つまり根本的に言えば、何もしなければ悪は生まれないのである。そもそもこの世に生まれなければ、私が苦しむこともなく、私がこの世に私の子を生まなければ、私の子が苦しむこともなかったのと同じように。

悪と無為について、シオランは次のように言っている。

ハムレット風の懷疑にやられた精神が他人に危害を加えた例はひとつもない。すなわち悪の原動

力は、意志の緊張に、キエティスム 静寂主義への無能力に潜んでいる。

『崩壊概論』13—14頁

この引用文では懷疑について言われているが、怠惰にも当てはまることである。すでに引用したように、懷疑は怠惰と同じくシオランが推奨する悪徳である。そして静寂主義への無能力とは、すなわちじっとしていることができずに、行為に向かおうとする傾向である。何もしようとしないう無為症患者は、じっとしていられない働き者よりはるかに害がない。

だから、人が悪をなすことを避けたいなら、避けなければいけないと思うなら、怠惰になることが必要である。危害を加えないという意味では、怠惰な人間は善を実現しようとさえ思わないで善を実現している。善を行おうともせずに善を行っている。

これに対して、善や正義を高らかに掲げる人間がしばしば人を傷つけ、殺人さえ厭わないというのはもはや常識と言っているだろう。歴史を引き合いに出さずとも、周りを見渡してみればそのような例はいくらでも見つかるだろう。とはいえ、善や正義を掲げない人間が他者を傷つけないかという点、決してそんなことはないのだが。

このようなシオランの怠惰と無為の思想は、彼だけが言っているわけではない。例えば

パスカルの次の言葉はよく知られている。「人間の不幸はすべてただ一つのこと、すなわち、部屋に静かにとどまっていられないことに由来する」『パンセー』前田陽一・由木康訳、中公クラシックス、2001年、100頁）。人間の悲惨さと人生のむなしさは途方もないのだが、私たちは「気晴らし」をして必死に考えまいとしている。とりわけ人生の結末である死のことを考えまいとしながら日々を過ごしている。「われわれは絶壁が見えないようにするために、何か目をさえぎるものを前方に置いた後、安心して絶壁のほうに走っているのである」『パンセー』132頁）。とはいえ、パスカルは無為による精神の集中と省察を奨めてはいても、怠惰を奨めているわけではないことは留意しておこう。

しかし、部屋に静かにとどまっていられないことに私たちの悲惨が由来するとしても、それでも私たちは部屋の外に出ていかなければならない。出ていかなければ飢え死にしよう。そればかりか、たいいていの場合には労働をしてお金を得なければならぬ。この意味では、シオランの言うとおり、「私たちの屈従は、すべて、飢え死にするだけの決心がでないことから由来する」『崩壊概論』270頁）のである。そうやって私たちは、飢え死にしないために日々災厄をこしらえているわけだ。

怠惰のユートピア

これまで、怠惰を奨励するシオランの思想を見てきたが、次のような疑問を抱いた人もいるかもしれない。すなわち、それでは、彼が言うような怠惰な人間ばかりになったら、いつたい世界や社会はどうなるのだろうか、という疑問である。

これはシオランもしばしば思いを巡らせた問いだ。そのときシオランは、この惑星が怠惰で、疲労に溢れ、退屈した人間で溢れかえることを夢見る。このヴィジョンは、力の衰弱のユートピアとも言うべきものになるだろう。彼は次のように言う。

崇高さと殺戮とにうんざりして、われわれは、世界大の規模における田舎住まいの退屈さを夢見る。

（『崩壊概論』17頁）

そのようなユートピアでは、人々は「聖なる無為」（『四つ裂きの刑』54頁）に没頭しており、もはや誰一人として何もしようとせず、誰も傷つけず、誰も生き生きと生きようとしなない。シオランはこのようなユートピアを、実現の可能性があったら、ある種の「歴史の終焉」の後に来るものと考えている。怠惰のユートピアは、もはや旧人類と完全に手を切

るまでに進歩した（あるいは退歩した）人間たちでなければほとんど不可能である。それゆえ、このユートピアは歴史や文明といった問題と関連している。歴史や文明については、後の章で取り上げるので、ここではひとまず怠惰に絞ってシオランのヴィジョンを聞いてみよう。

生き残った者たちは行為の妄想から覚め、無変化、無活動の方に立ち戻って、それを愛し、それに耽し、新奇なものが見せる幻術にも、もはや惑わされまいとするだろう。

（『四つ裂きの刑』73頁）

とはいえ、繰り返しになるが、まったく行為しないで生きることとはほとんど不可能である。呼吸すらできなくなってしまう。さすがにそんなレベルまで何もしたくないわけではない、という人は多いだろう。部屋のなかでじっとしていることができる人でも、退屈が耐えがたく感じられるようになるだろう。

そこで私たちはある程度妥協して生きていくことになる。怠惰な人はとことん怠惰に、そうでもない人はある程度調整して。ここで「気晴らし」がふたたび必要とされてくる。どれほどむなしい幻影でもそれは生きるために必要なものなのだ。「われわれは、幻影なし

には一刻たりとも生きることができない」(『崩壊概論』18頁)。

横たわることと、怠惰の重要性

それでも強調したいのは、たとえ不完全であつたとしても、怠惰は重要な「悪徳」であるということだ。人間は直立して活動するほかにも、睡眠や休息など、横になることが必要である。そして怠惰とは物事を横にすることであり、また自らも横になることである。

困難な問題を解決しなければならず、重大な転機に直面したら、そういうときはいつも、ベッドにもぐり込み、待つのが一番だ。直立の姿勢で行う決断には二束三文の価値もない。それは思い上がりに、あるいは不安にそそのかされたものだから、性急なものだ。(『カイエ』950-951頁)

このかぎりでは、怠惰は意識をまどろませることはなく、むしろ覚醒させるものである。立ったまま勢いで行う決断ほど、意識を性急に規定し、可能性の幅を狭くするものもないだろう。怠惰は性急さと狭隘きょうあいさと、行動という魔術から私たちを解放してくれるのである。

この点に関して、次のエピソードを紹介したい。私は2014年の11月、ルーマニアに

滞在していた。当地ではちょうど大統領選挙があり、街中には候補者のポスターがたくさん貼られていた。そのなかのひとつに、候補者の写真とともに、「言葉ではなく行動！」というスローガンを掲げているポスターがあった。これはもちろん陳腐なスローガンではある。しかし私は不穏なものを感じざるをえなかった。なぜなら、1930年代のルーミアのファシズム組織が、まったく同じ言葉のスローガンを掲げていたと知ったばかりだったからである。もちろん、その候補者は明らかにファシストではないにもかかわらず。最終的に、その候補者は選挙に勝利し、大統領に就任した。

これにはいろいろな見方があるだろう。なぜ私たちは行動をよびかけるほうが魅力的に感じるのか、という問いも立てられる。そして言葉に依拠する民主主義政治の難しさという問題も取り出せるかもしれない。あるいは、言葉ではなく行動を呼びかける際にも、言葉を使わざるをえないという問題もそうだ。

しかしここでは、怠惰との文脈で見えていきたいと思う。怠惰に関してこのエピソードから引き出すことができるのは、怠惰は行動への呼びかけによって起きる金縛りを解除できる、ということである。行為の拒否である怠惰を自らのなかで大切にしている人は、行動が至上であるという前提を持っていない。それゆえ、怠惰な人は、横になってゆっくりと

考えることができる。この実的な重要性も、怠惰の「高貴さ」のひとつであると言えるのではないだろうか。

何かを「する」ことだけが重要なのではないのだ。この世に生まれたからには何かをしなければならぬ、というわけではないし、何かを生産しなければならぬわけでもない。「行動したり、創造したりすることだけが問題ではない」のだ『シオラン対談集』254頁。

以上、怠惰の賛歌で本章を閉じたいと思うが、本章の冒頭で社会問題について触れたので、最後に一言述べたい。どうも世間では怠惰な人間は目立たないというのが筆者の印象である。だが、もしかしたら私が思っているより、社会には怠惰な人間が多いのかもしれない。目立たないだけで、思ったよりたくさんいるのかもしれない。だが、そんなに怠惰な人間が多いのに、社会がそれなりに機能している（ように見える）というのはどういうことか。もつと盛大に壊れてしまってもいいのではないか。

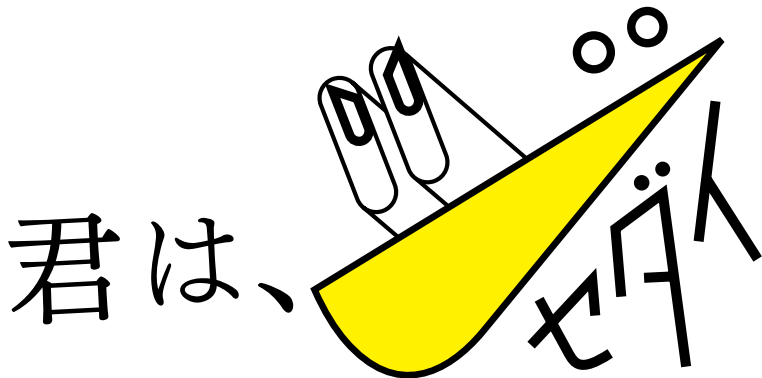
すると、問題は、神秘的な怠惰ではもちろんなく、明らかに仕事をしない「高貴な」怠惰（無職など）でもなく、怠惰でありつつも仕事もするという、それほど「高貴」ではない、中途半端な怠惰人間がたくさんいるということになるだろう。この中途半端で、それゆえとても日常的な怠惰に関しては、また機会をあらためて考えてみたいと思う。

ところで、労働を厭う人でも、うつかりいい仕事をしてしまつて、上司から褒められたり、周囲から承認されたりすると、仕事を誇らしく思い、やりがいを感じてしまうこともある。これは一種巧妙な罠であつて、このケースに対してシオランは苛烈な言葉を発しているので、私も含めて身に覚えのある中途半端な人は猛省してもらいたい。

命じられた仕事をやってのける満足感（特に、仕事を信じておらず、軽蔑さえしている場合）、その人間がまだいかにばかり深く、賤民の群れに根を下しているかを示すものだ。

（『生誕の災厄』219頁）

付け加えれば、シオランといえども、この中途半端さから逃れられているわけではない。彼は最後まで自殺しなかつたし、作家としては、ガリマール社というフランスの超一流出版社から十冊以上の本を出し、最初は全然売れなかつたとはいえ、最後には成功し、それなりに世界中で読まれ、引用される人物となつた。そして社会的には、パートナーに寄生して一生を過ごした。これは見事ではあるけれども、やはり社会にとどまっていたことには変わりはない。このシオランの中途半端さには、本書の最後で触れることにしたい。



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!